
けいおん ～奏でる物語～

桜 みずき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん ～奏でる物語～

【Nコード】

N 8 7 5 6 Y

【作者名】

桜 みずき

【あらすじ】

朱智^{あけち} 遼^{りょう}は自分の容姿にコンプレックスを持っている。尖端恐怖症で伸びっぱなしになながらも、しっかり手入れをしている長髪と持ち前の童顔ちびっ子なので女の子と間違えられる事がある遼は軽音部の部長に半ば強引に軽音部に入れられてしまう。

そけで巻き起こる軽音楽の物語。気まぐれに突っ走ります！

プロローグ！（前書き）

始めましての方、始めまして！

お久しぶりの方、お久しぶりです！

さて、『けいおん　〜奏でる物語〜』が始まるよ〜

みんな一緒に「せえの！」でアレ言っよ！

せえの！！

『No Thank you!!』

ちよ！それEDでしょ！！

しかも、否定されたし！

ちなみに何て言えは良かったんだろw

では、本編をお楽しみ下さい！

ブローグ！

ピピピッ！…ピピピッ！…ピピピッ！…

自室に目覚まし時計のアラームが鳴り響く。

俺は重たい瞼を開けようと頑張りながら手探りでうるさい音を消そうと奮闘する。

「…あ…何処だっけ…？」

しかし、目覚まし時計にいつまで経っても触る事が出来ない。

いつもと同じ場所に置いているので、いつもと同じ場所に手を伸ばせばアラームを消せるのにもかかわらず、今日は目覚まし時計に触れる事ができなかった。

俺はこのままじゃうるさいので、しょうがなくベッドから顔を上げ、枕元を見る。

「あれ？」

やはり、枕元には目覚まし時計がなかった。ベッドの下を見てやると目覚まし時計が転がっていた。

俺はアラームを消すと、ベッドから降りて自室を出る。

リビングに向かうと朝ご飯がテーブルの上に並べられていて、キッチンではカチャカチャと音を立てながら皿洗いをしている同居人

がいた。

「おはよう、奈亮^{だいすけ}」

俺は同居人、水河^{みながわ} 奈亮に挨拶をした。

「お、起きた？ 遼^{りょう}もおはよう」

「うん。おはよう」

俺達は2LDKの『広い』に分類される家賃7万円のマンションに住んでいる。とは言ってもまだ一週間だけだけど…。本当は俺一人で住むことになっていたが、訳があつて奈亮と一緒に住むことになった。

まあ、自慢じゃないけど、俺の親は結構な金持ちだったりするので、毎月12万円の仕送りがある。家賃も奈亮と半分ずつ払っているので実質家賃3万5千という格安だ。

奈亮は皿洗いが終わったらしく手を拭いてリビングに顔を出す。

「いよいよ今日だな」

不意に奈亮が言った。

「今日から高校生かあ…」

だけど意味はわかった。今日は俺達が入る高校の入学式。

『私立桜ヶ丘高等学校』

それが俺達の入る高校の名前だ。去年までは『私立桜ヶ丘女子高等学校』だったが、今年度から共学校になった。理由は良くは分からないが、巷では「少子化の問題ではないか」と言われている。

「男子何人いると思う？」

俺は奈亮に聞いてみた。

「さあ？ わっかんね」

俺達は席に座り、朝食を取る事にした。

卵焼きに、塩鯖、そしてみそ汁に白いご飯……毎回思うけど、100点の朝食だ。奈亮の料理の腕は本当に凄い。夕食もかなり手間がかかっているのを作ってくれる。しかも、料理以外の家事も全般やっつけてくれるものだから、将来は良い主夫になりそうだ。

卵焼きを半分に割ってみる。中は程よく半熟、さらにはチーズも入っていた。

その卵焼きを口にいれる。卵焼きが口の中でとろけ、一瞬にして味が口いっぱい広がる。

「ああ……もう、成仏していい……」

「おいおい、大袈裟過ぎだ。それに、そこで使う表現として正しいのは、『昇華していい』だろ。成仏じゃもう死んでるぞ」

奈亮がツツコンでくれた。どうやらツツコミの腕も多少有るようだ。

そんなやり取りをしながら、20分弱奈良が作った朝食を堪能した。

・・・・・・・・・・・・・・・・

朝食を終え、自室に戻り桜高の制服を着た。深い紺色のブレザーに学年色の青のネクタイに紺色のズボン。それを身に纏った俺は姿見に映る自分をみた。

「……………似合わなっ！」

あまりの似合わなさについつい叫んでしまった。しかし、似合わない原因は自分の顔にある事は分かっているのではないことだ。

髪を切る事を躊躇いながら3年間も伸ばし、腰辺りまで届くようなしっかり手入れのしてあるサラサラな髪。男とは思えない可愛い顔。男とは到底思えない線の細い体つきに小さい背。誰がどう見ても男装をしている女子だ。

「はぁ……」

俺は溜息を吐きながらスクールバッグを持ち、自室から出た。

自室を出ると奈良が待っていた。

「遼も用意出来たか」

「……………」

「どうした？」

「いや、何でもない…」

奈亮は普通に桜高の制服を着こなしていた。元々背が高く、見た目も人目を引くほどのかつこよさがある。髪もワックスをかけているらしく、かなり決まっている。横を歩くのを躊躇したくなる程のイケメンになっていた。

「やっぱり奈亮ってかつこいいな」

俺は少し悪意を込めて言った。ただ単に奈亮がかつこよすぎるから嫉妬をしているだけだが…。

「そうか？おれは遼が女だったら良いな〜って思うこと結構あるぞ。可愛いし。私服姿なんてまんま女の子にしか見えないし」

「なっ…！！俺は男だ！可愛いとか言われても全然嬉しくねえよ／＼！」

「はっ！そんな顔赤くしちゃってさ、本当は嬉しいんじゃないの？」

「おうえ…BLとかやめろよ…。気持ち悪い」

「そうか？遼とだったら花があって良いと思うぞ？」

「奈亮…。それ本気で言ってるなら病院行ってこい」

「んじゃ学校行く前に病院行くか」

「マジで本気で言ってたの!？」

「あははは!嘘だよ嘘!ほら、時間無いから行くぞ」

「あ、うん」

俺達は新しい生活の第一歩を踏み出し……

「うお!」

奈良が何故か玄関で躓いた。

「空気を読んで欲しいね。まったく…!」

「何故俺はキレられた？」

「自分の胸に聞いてみる」

何はともあれ新しい生活の第一歩は踏み出せたから良しとしますか。奈良は異様に小さい一歩だったけど…。

プロローグ！（後書き）

次回から原作キャラが出ます！

楽しみにしていて下さい！

ちなみに1週間に1回のペースで更新していきたいと思えます！

第一話『入学!』（前書き）

二日連続の投稿!

ふう…期末テストが終わったから気楽にいけて良いですよ

……あゝ…センター試験だるい…

では、本編をお楽しみ下さい!

第一話『入学!』

「入試の時にも思ったけど、やっぱり桜高ってデカイな…」

まだ肌寒さを残す4月の上旬ちよい過ぎ。私立桜ヶ丘高等学校の校門で、目の前に広がる桜高を眺めながら俺は正直な感想を述べた。

「だな。廊下もフローリングだったし、校舎の中もかなり広がったしな。さすが私立って感じた」

隣にいる奈亮も同意し、俺に繋げて評価の感想を述べた。

「まあ、こんなところで立ち止まったら入る人の迷惑になるから、敷地内に入ろうか」

「ああ。そうだな」

俺達は桜高の敷地に入ろうと足を動かそうとした瞬間、左から声が聞こえてきた。

「その人達どいてえ〜!!」

左を向いてみると猪突猛進の如く駆け抜けて来る一人の女子生徒がいた。

奈亮は軽やかに避けたが、俺は反応速度が遅かったせいでその女子生徒に轢かれてしまった。

「あいた!」

「…って！」

女子生徒とその場に倒れ、俺は背中を強打し、手に持っていたスクールバッグも少し離れた場所に落としてしまった。

「つてえな…」。おい、大丈夫か？」

俺は背中が痛くて仕方ない体を起き上がらせ、ぶつかってきた女子生徒の心配をする。避けられなかった俺が悪いしね。

「あわわわ…！だ、大丈夫です！す、すみませんでした！！」

女子生徒に怪我はなく大丈夫だったらしく、少し焦りながらも、しっかりと頭を下げて謝ってくれた。

「いや、そんな謝んなくていいよ。俺にも落ち度はあったから」

「何でもいいが、遼達の周りにギャラリーが出来てることを忘れんな」

「唯……何やってんのよ…」

「「えっ！？」」

奈亮の発言により少し焦り、周りを見渡して見ると十数人の生徒に囲まれていた。心なしか、大半の生徒は女子で、男子は四、五人しかいなかった。

そして、目の前にいる女子生徒は顔を真っ赤にして「本当にすみ

ませんでした。」と言ってメガネをかけた女子生徒と共に桜高へ入って行った。

「散々な目に遭ったな」

「うん。ていうか、背中めっちゃ痛え」

「ほら」

俺は背中中の痛みを訴えると、奈亮が手を差し出してくれた。その手を掴み、やっとの事で立ち上がる事が出来た。

「なっ!」

「遼?どうした?」

立ち上がり髪を整えようとしたら、髪の毛が背中中の半ばから腰辺りまでずたずたになっていた。という事は……。

「そんな……」

「そっか。遼は尖端恐怖症だからハサミを自分に向けられるのが怖いんだっとな」

「爪楊枝だって生まれてこの方使ったことねえよ!自慢じゃ無いけどな!」

「そっだな。自慢にならないな」

「にしてもどうしよう……。こんなになっただんじゃ、もうどうしようもねえよ……」

俺は自分の髪を見ていると、目頭が熱くなっていた。

「じゃあ、とりあえず髪を結ってみたらどうだ？それで多少はごまかせる」

仕方なく奈亮の案で妥協した。

近くに転がっていたスクールバッグを取り、バッグの中からゴムを取り出し、それで後ろ髪を纏めた。

「どう？」

「うん？ダメだな。これだけ髪が自由の利く縛り方じゃダメだ」

「じゃあ、どうしろと？」

「ポニテ」

「は？」

「ポニーテールにすれば良いと思う」

「出来る訳ねえだろ！恥ずかしいわっ！」

何を言い出すかと思えば…。前から言ってますが俺は男です。そんな女々しい野郎じゃありません！

「でも、そんなはずたの髪を晒し回るよりは良いと思うぞ」

「確かにそうだけど…」

「それにお前なら可愛いし似合うと思うぞ」

「だ・か・ら！可愛いとか言われても全然嬉しくねえよ！！」

だが、確かに奈亮の言う通りなので、俺は渋々髪をポニーテールに結うことにした。

髪を少しずつかき上げていき、髪を縛りポニーテールにした。

「どう？」

「バッチリ似合ってる！」

「似合ってるか似合って無いかを聞いたんじゃねえよ！髪は不自然じゃないかを聞いたんだよ！」

「ごめんごめん。大丈夫だよ。跳ねてないから気にすんな」

「本当に？」

ちよつと信じられないのでまた問い詰めたが、奈亮は焦った感じでこつ言った。

「って！やばい！あと、10分もしない内に入学式前のHR始まるぞ！」

「マジ！？」

時計を見てみると八時半を回っていた。

俺達はクラス分けを急いで眺め、同じ三組だったことを喜びながら教室へ向かった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

その後、HRには間に合い、入学式も無事に終えた。そして、今は自己紹介と言っだるゝい消化任務なのだが、自己紹介に入る前にあった席決めでちょっと問題があった。右隣は奈良で何の問題もなく、嬉しいことだったのだが、左隣が問題だった。

何の因果か知らないが、左隣は今日の朝に俺にぶつかった女子生徒だった。

「私は『平沢 唯』って言います！」

そして今はその彼女の自己紹介の番だ。名前は『平沢 唯』と言う可愛い名前だ、良く見てみると結構可愛い子だったりする。

「好きなことは家でごろごろすることです！」（キリッ！

そして、性格が残念だった。

「（そんなことや顔で言われても……）」

「そ、そう。とってもユニークな趣味してるのね……。」

先生も呆れながらそう言った。

「えへへ。そうですかあ？」

それなのに平沢さんは褒められてると勘違いして、照れていた。

「それじゃあ次、朱智君^{あけち}。お願いね」

遂に俺にも順番が回ってきた。何故か急に緊張してきたが、俺は立ち上がり勇気を振り絞って声を出した。

「俺は『朱智 遼』です。ここには先週引越してきたばかりなので、地元の事を良く知りません。なので、皆さんにいろいろとご迷惑をおかけすることがあると思いますが、精一杯頑張りますので、どうかよろしくお願いします」

すっかり言えた。と、自己紹介の余韻に浸ろうと思ったら隣の平沢から拍手が聞こえてきた。そして、その拍手が何故か教室中に広がった。恥ずかしさのあまり平沢にチョップをお見舞いした。

「あいた！」

「自業自得だバーカ」

俺は小声で平沢に言った。

「遼ちゃん照れてますな」

「遼ちゃんとか言っな。女の子っぽいだろ」

平沢の発言はスルーして、変な嫌な呼び方を言うから、やめるように言った。

「だって遼ちゃんは遼ちゃんじゃないじゃん」

「朱智君？平沢さん？自己紹介が進まないからちよっとその辺にしておいてくれる？」

平沢が意味不明な事を言った瞬間、先生に注意され、渋々黙る平沢。

「それじゃあ水河君。お願いね」

奈亮の番がきた。どんな自己紹介をするのかと思い、ワクワクしながら聞いた。

「俺は『水河 奈亮』って言います。特技は料理です」

という味っけない普通の自己紹介をして席に座った。

それから約20分後にクラス40人全員＋担任の自己紹介は終わり、桜高第一日目は終わった。

第一話『入学!』（後書き）

唯ちゃんの登場です！

本家よりゆるい唯ちゃんになっちゃった気がします。が、そこは愛嬌でカバーということでは…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8756y/>

けいおん ～奏でる物語～

2011年11月27日12時55分発行